



寝床屋の落語出た帖 弐

試し読み

● 時うどん

「お、うどんや、うどん。ぬくいの一つ頼むわ。寒いなア」

「へえ、らつしゃい。今晚はぬくいようですなア」

「へ、ああ、ぬくい晩にぬくいモン食うて、ぬくうするのが通つてもんや。おや、アンタはんのとこの看板変わつとりよるなア。的に矢が…、当たつとらんや。ずいぶん簡単な看板やな。丸がかいてある。ああ、丸屋」

「なんだか、昨日の晩見たようにはうまうまいかない。」

「と、うどんはまだやな…」

「火、つい今落としてしまいましたん」

「ほうか、ま、うどんはどつしり構えて食うもんやからな。蕎麦みたいに、おい、言うたら、アイヨ、と出て来て手に取るが早いか食い終つとるようなもんは、感心せんよな」

「ぶつぶつと一人ごちながら、うどんが出てくるのを今か今か、と待った。」

「お待ちどう」

「お、来よつた来よつた。この割り箸が…、割れへんな。ああ、途中から折れてしもた。ここは、丼が…、ひびはいつとる。ま、この縁の尖り具合が鋸の代わりにも使えるからええわ。どれどれ、うどんはやつぱり出汁やな。…生臭ア。煮干

しやけど、えらいぬるい上に腹取つてへんのとちゃうか。いやいや、うどんはこの太さ…。えらい細いな」

「うちは蕎麦屋ですわねん」

「ああ、蕎麦屋だつたんか。ま、細い方が出汁とよお絡まつてええわ、蕎麦いうたらチクワやな。このチクワが厚い…。えらい薄いな。向うが透けて見えとるわ。もつとも厚く切つたかて麩を入れてる所もありよるしな、アンタはんのとこは、あー、ホンマもんの麩やわ」

「うどんのはずが蕎麦だつたり、誉めようとする端から誉める所がなかつたりして、ちつともうまうまいかなかったが、何とか食い終わり、いよいよ勘定と言う時。」

「ごちそうさん」

「おおきに。十六文になります」

「よしよし、手を出し。えらいこまいんや」

「そして一枚一枚数えながら主人の手に銭を置いていった。八つまで数えたとき、男が尋ねた。」

「ところで今何刻やろ」

「四つですわ」

「五つ、六つ、七つ…」

以下次号に続く。

【由来・成立】

享保十一年（一七二六年）の笑話本『軽口初笑』の「他人は喰より」が元と言われています。

同様の話は、安永二年（一七七三年）『坐笑産』の「あま酒」、天明三年（一七八二）『富久喜多留』の「甘酒」、安永二年（一七七三）『芳野山』の「夜鷹蕎麦」などにも見られます。

【ウンチク】

時蕎麦落語の後半部分を、上方落語の時うどんでパロディにしました。

この落語は、そもそも時うどんの方がオリジナルであるとも言われています。

原話とされる『軽口初笑』の「他人は喰より」では、蕎麦切りですが、勘定をする段階で一文足りないことに気付いて、時刻を聞いてちようどいい時分であったためそれに乗じて誤魔化すことが出来ました。『芳野山』の「夜たかそば」も同じく手持ちが足りないのの後で気づくパターンです。

『坐笑産』の「あま酒」のほうは、注文より前に一文足りないことに気付いていて、端から騙すつもりのパターンです。

落語になった時蕎麦のほうは、蕎麦屋を褒めちぎって代金を誤魔化すところを目撃した男が、自分も真似しようとして余計に金を払う羽目になりますが、先の男が端から騙すつもりだったのかについては触れられていません。落語のネタへと変わった時に、この「端から騙すつもり」なのに、蕎麦を褒めるくだけりから始まって勘定まで、登場人物が見た通りに再現しようとしても出来ない、すべてが掛け違っていくところが面白みに繋がっているのかも知れません。

一方、上方ネタの「時うどん」のほうは、友人二人が妓楼を冷やかにに行った帰り、余りの寒さにうどんを食おうと持ち掛けますが、ほとんど兄貴分の方が食べてしまえます。そして勘定の時に一文誤魔化します。これも先に二人の持ち分を合わせても一文足りないのが判っていて、端から騙すつもりのパターンであり、それは原話の方からも引き継がれています。むしろ、騙す罪悪感か、それとも店主の意識を逸らすためか、うどんを褒めちぎるやりとりが、時蕎麦に比べてぎりぎりの所を危うく切り抜ける様がより人間臭さを醸し出しているように感じます。

個人的に調べた限りでは、時うどんがオリジナルか、そうでないかはつきりしません。恐らくは屋台から何かを買うのがベースで、それは演者によってうどんだったり、蕎

● ろくろ首

お暑うございます。エエ、此の間中は、蒸し蒸しとして、寝られない、と言う方も多いのではないでしようか。

そんな暑い日には、こんな話もオツなものでは。

与太郎が、伯父である甚兵衛の表店へ訪ねて来ました。

「こんにちわあ」

「アア、お前さんかいな、ええとこへ来た、まあ上がりいな」

「へえ、上げさしてもらいます」

さて、甚兵衛、この与太郎に「婿養子に行かないかと縁談をすすめます。与太郎の方もびつくり仰天。何しろこの男、二十五になつても独り身で、ぶらぶら遊んで暮らしてる。伯父を『あんた』呼ばわりに、兄嫁が色っぽく御膳で兄貴に酌をする姿を羨ましがり『嫁

が欲しい』と宣えば、甚兵衛が『しかし、どうして食わせる？』と、きくのを『箸と茶碗』なんてこたえる始末。先から働こうなんぞ考えないもんだからついでの間も説教を頂戴したとこで。

「何でつか？ こんなパツパラアな人間、もろたる言う人いてまんのか？」

「それがいてるんや。……商売が紙屋さんや。財産がそこそこあつて、借家もぎょうさん持つてはる立派な家や。娘さんも綺麗な人や」

「へえ、別嬪さんだつか」

「町内でも今小町と言われているほどの別嬪さんやなあ。ただ、言うとかなああかんのは、この娘はんには一つだけキズがあんねん」

「なあ、そらそやろ。わたいをもろたる言う人や、普通の人やないとは思いました。そのキズ言いまひよか、当てまひよか」

と、言いたい放題、折角婿に迎えてくれようという人を、散々にけなします。流石に間を取り持とうと言う甚兵衛も、聞いていられなくなり

「ちよっと黙って聞いてなはれ。そのキズというのは……昼間は何とも無いねんけど、時計の針が丑三つ時に手が届こおかという時分になると……」

【由来・成立】

明治三十八年に三遊亭円左が新作として上演しました。万延二年（一八六一）の桂松光のネタ帳『風流昔噺』の「源兵衛養子の世話但しくびの出入二こまる」が元ネタと考えられます。

【ウンチク】

『倭漢三才図会』によれば「飛頭蛮」の項に「大閩婆国（今のジャワ島）に昼は普通の人と変わらないが、夜になると頭が飛ぶ人が居る、と言う話が載っています。頭だけでなく、両手が飛ぶ人、耳を翼のようにして飛ぶ人、など諸説ある、と書かれています。

日本でのろくろ首は、首が完全に胴体から離れるパターンと、体と頭が細い糸のような首で繋がっているパターンがあるようです。

首が胴体から離れてしまうものは『飛頭蛮』や『抜け首』、『生首』と呼ばれますが、『飛頭蛮』（戸頭蛮とも）は中国から伝わってきた名称がそのまま踏襲されたと考えられます。面白いのは、『倭漢三才図会』の説明では首だけが飛ぶ話がされているのに、挿絵は首と胴体が繋がっていることです。

ろくろ首が文書に表れてくるのは、江戸時代になってから

です。

確認できた資料として一番古いのは、俳諧集である『鷹筑波』（寛永十九年「一六四二」）における一首です。

その後は寛文三年（一六六三）に出された絵草紙『曾呂利物語』の巻第一に載っている「女のまうねん迷ひありく事」に始まり、百物語、随筆、そして小咄にもろくろ首が登場します。

百物語の体裁を取った怪談系の草紙としては、『古今百物語評判』巻之一「絶岸和尚肥後にて轆轤首見給ひし事」（貞享三年「一六八六」）、『太平百物語』巻四「三十六 百々茂右衛門ろくろ首に逢し事」（享保十七年「一七三二」）、『新説百物語』の「見せふ見せふといふ化物の事」（明和四年「一七六七」）などがあります。

『曾呂利物語』は首だけ、『古今百物語評判』のろくろ首は首が伸びたのが書かれています。『太平百物語』は首だけが見えたので伸びているかどうかは不明、『新説百物語』は首だけの記述になっており、「ろくろ首」には首が伸びるパターンと首だけのパターンのどちらもあることが判ります。

十返捨一九の『列国怪談聞書帖』（享和二年「一八〇二」）、『怪物輿論』（享和三年「一八〇三」）も怪談系の草紙で、『列国怪談聞書帖』の中で書かれるろくろ首は、人を殺めた自分

● 初天神

羽織を作ったばかりで、あちこちに見せびらかしたくて堪らない男。折角だからと初天神でお参りに行こうと思いい立つ。が、いざかみさんに羽織を出してもらって出かけようとする、息子も一緒に連れて行けと言う。

ところがこの息子、外へ出れば悪戯放題であちこちから苦情ばかり。口を開けば生意気な口を聞く困った子供。父親としては初天神にかこつけて、厳しい懐を何とかやりくりしたへそくりでちよつと寄り道なんぞをしようかと言う魂胆。キユツと一杯引つ掛けようか、それとも美味しいものでも抓もうか、と頭の中で描いていた計画が、子連れとなったら水の泡。やだよ、イヤだよ、と断っているところに、その息子本人が現れる。

「どっか行くンなら、オイラも連れてつて」

と来た。仕事だと誤魔化したが、

「嘘だよ。お父ちゃん、今日仕事あぶれたの知ってんだい」

と来る。とどめが

「大人しく頼んでる内に連れてきゃあためにもなるのに」

などと、まこと子供らしくない口を聞く。このまま放つておいたら、とんでもない悪さをするかもしれない、と根負け

して連れて行くことにする。が、新しい着物もない、何か買ってというのも禁止だと言えは、

「ちえ、なんだい。お父ちゃんが酒ばかり飲んでるからだよ。なんか入れ替えるものないのかい？」

と、質入して金の工面をしていることも知っている様子だから、恐ろしい。

ともかくにも息子を連れて天神様へお参りに出発すると、案の定大福買って、と始まった。大福は毒だからダメだ、と言えは、次は蜜柑と来る。蜜柑もダメだと言えは、羊羹を買っておくれよ、と次第に高いものを挙げてくる。羊羹は高いから大毒だ、と言えは、高いと毒なんだ、との返事。この子は何もかも判つて言っているのではないか、と一抹の恐ろしさを感じる父親だった。せめて子供らしいものをねだれ、と言えは、子供らしいものつてなんだい？ とまことに可愛らしくきよとんとした顔で聞いてくる。

何だ、子供は所詮子供じゃないか、と安心して飴のようなものだと言うと、即座に後ろにあるから買って、と言い出す。

まさか店があるとは知らなかった父親は、間の悪い所にいやがるとぼやくしかない。仕方なく店主が嫌がるほど一番大きい飴を吟味して買ってやった。

しばらくは飴が口の中にあるから、大丈夫だろうと思つていたが、今度は息子がわざとぬかるみの中を歩いて、泥を跳

【由来・成立】

安永二年（一七七三）『聞上手』の「凧」が原語と見られます。

上方落語の笑福亭系の祖といわれる、初代松富久亭松竹（生没年不詳）が落語にまどめたものといわれています。

松竹は少なくとも文政年間（一八一八〜三〇）以前のひとされるので、この噺は大坂では文化年間（一八〇四〜一八）にはもう演じられていたと推測されます。

【ウンチク】

現在では途中の「飴がおなかの中に落っこちた」で終わることが多いようです。買うのを散々渋ったくせに、結局凧あげに夢中になってしまふ父親に、子供が大人の口癖を真似して「こんなことならお父ちゃん連れてくるんじゃないか」と言うサゲは、小生意気な台詞ですが、拗ねた子供の精一杯の強がりのようでもあって微笑ましくて好きです。

凧は上方では「イカのぼり」、略して「イカ」、関東では「タコ」と呼んだそうです。他の地域では、ハタ、タカなどとも呼ばれていたとか。『嬉遊笑覧』によれば、その通り本当にイカの形だったそうです。『近世風俗志』では縄や紙で足を付けた格好がイカやタコのように見えたからではないか、と書いています。

凧の形には様々なものがあつたようです。自分などは角形をした凧を思い浮かべるのですが、最近ではゲイラカイトなどのスポーツカイトや、人の形をしてまるで空中を泳いでいるような凧の他、カラフルな模様と形の多様な凧が見られます。試しに某電脳通販で検索してみたところ、所謂角形の「和凧」の方が希でした。（マジに立体のタコやイカの凧があるんだけど……。びつくり……。）

錦絵などを見ると、角形の凧が多く描かれている他、奴凧、鳶凧、六角、丸など色々な形の凧があつたようです。凧の表には、現在のものにも負けないほど、カラフルな絵柄や、文字を意匠化したデザインが多くありました。

凧は世界中にあり、中国なら紀元前三世紀、ヨーロッパは前四世紀のギリシアで使われていたとか。中国から日本に伝わってきたのは平安時代に書かれた『和名類聚抄』に記述があるので、その頃だと言われています。「紙老鴿」、あるいは「紙鳶」と呼ばれ、その名の通り、紙で作った鳥（鳶）の形をしていました。中国、ヨーロッパとも、本来は玩具ではなく、気象観測や軍事目的で使われていたそうです。

また作中の「うなり」は、方形の凧の、上の二隅に渡した鯨髭を、凧をやや弓なりに反らせるようにびんと張つたもので、凧に当たるとぶうんと音が鳴つたそうです。この音がまるで雷のようだ、と言う俳句もあつたとか。作中で父親がう

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: @nedocoya4pr